号外

The Vet Allergist

アレルギー性皮膚疾患に関するTOPICS

published by
SPECTRUM LAB. JAPAN
2009. 11

スペクトラム ラボ ジャパン㈱ テクニカル ディレクター 荒井　延明

An informational overview on in-vitro allergy testing

第25回 George H. Muller 獣医皮膚科年次セミナー

会期：2009年11月4日～11日（参加：11月4日～6日）　開催地：Kauai, Hawaii

上記セミナーに参加して得たアレルギー性皮膚疾患に関する最新情報をTOPICSとしてお届けします。

1. 痒みのある皮膚疾患の除外診断は外部寄生虫とノミアレルギーのルールアウトから

本セミナーのチェアマンであるU.C.DAVISの Dr.Ihrke は、診断アプローチ中のノミアレルギー除外診断の重要性を強調されていました。犬の下半身に限局した痒みと皮疹を発現した症例は、まずノミのアレルギーを疑い、診断的治療を実施します。自宅環境にノミの存在を認めたがらないオーナーの心情を理解した上で説得することが肝心で、その手技として日本でもNovartis社から発売されている**プログラムA錠**（米国ではCapstar®）を1ヵ月間、連日～隔日経口投与することが副作用のない安全で確実な除外診断のスタンダードであることを確認しました。

2. マラセチアのコントロールにはイトラコナゾールのパルス療法が有効

ペンシルバニア大学の皮膚科准教授であるDr.Morrisはマラセチア皮膚炎の発症する病態として、アトピー性皮膚炎（AD）のみならず、亜鉛反応性皮膚炎や肝皮症候群、腫瘍随伴性皮膚障害の臨床例を多くの画像で紹介されました。痒みのある皮疹部から強拡大（×1,000）でマラセチアが1つでも見つかればその二次感染をコントロールすべきことを強調し、その治療はアズール系抗真菌剤の内服を主体としていました。日本では動物薬未発売なものの、人用ジェネリックも入手できる**イトラコナゾール**は1週間のうち2日間だけ連日5mg/kg SID投与を3週間でワンクールとして、犬にも猫にも適応できる肝臓負荷の少ない治療薬であることが確認できました。

3. ステロイドの安全な年間投与量上限とADへのシクロスポリンの適応

PhDでありTexas Gulf Coast Veterinary Specialistで専門医として皮膚とアレルギー疾患治療に従事するDr.Fadokは、母親目線から動物に優しい治療として、ステロイドの安全な年間投与量に上限を定めていることを紹介されました。Pfizer社のDr.Sousaが提唱した体重（kg）×30mgをプレドニゾロンの年間投与量上限とするものです。講演後の個人的な質問には、天疱瘡などの自己免疫性皮膚疾患にも適用しており、治療当初は免疫抑制量で投与したとしても、症状の緩和に伴い、アザチオプリンやシクロスポリンのような代替薬の導入によりステロイドを漸減し、上限を守るように努めるとコメントされました。

シクロスポリンのADに対する適応については、長期安全性が確認できていない点を憂慮し、**①高齢症例。②減感作療法がうまくいかなかった症例。③ステロイドの要求量が増した症例。④糖尿病やクッシングなどステロイド禁忌の症例。⑤減感作療法の効果発現まで待てないオーナーの症例。**に限定した使用基準を設けていることを提示されました。

補足：パネルディスカッション中、シクロスポリンのジェネリックについての質問への回答としてDr.Ihrkeが、動物薬メーカーの販売力や開発力を奪わないようにするために、動物薬が販売されている製薬に関してはジェネリックや人薬の使用を控えるモラルが必要であると強調されていたのが印象的でした。

4. 急速減感作療法の合理性と有用性

Dr.Fadokは、一般セミナーの中で、減感作療法をAD治療法の選択上位に挙げ、急速減感作のメリットや合理性を説明されました。利便性やアフターサービスが充実したIgE検査会社を選択し、そのラボで提供する抗原を用いた皮内反応とIgE検査結果を個々の症例により使い分けている姿勢が印象的でした。

5. 皮膚バリアの改善は新しいアトピー性皮膚炎の治療アプローチ

ADに対する免疫的治療法の中でも、減感作療法は依然として最終的に症状を部分もしくは完全寛解に導くことができる唯一の治療法として認識されていますが、一方で皮膚バリアの改善に対する新しいアプローチ法が注目されています。日本では既に発売されている**ダームワン（Virbac社）**が米国でも新発売されたこともあり、表皮細胞間脂質を補充できる脂質複合体（セラミド・脂肪酸・コレステロール）が外用ローションとして紹介されました。

6. フレンチブルドックに多いアトピー様皮膚疾患（Atopic-Like Dermatitis：ALD）の存在

ステロイドと抗生物質に反応が鈍く、シクロスポリンも効き難いALDがフレンチブルドックに多いという事実は米国の専門医のみならず、一般開業医にとっても共通の問題点のようでした。日本で経験した皮膚バリア改善と免疫調整治療の併用による治験例をDr.Fadokに紹介したところ、光栄にもパネルディスカッションの中で紹介される機会を得ました。